



魔装少女は  
巨乳なひ

小説  
懺悔  
挿絵  
樺糖練乳

二次元  
萌え  
少女

18  
未 満

試し読み版

# CONTENTS

004 一話 勝利と喪失

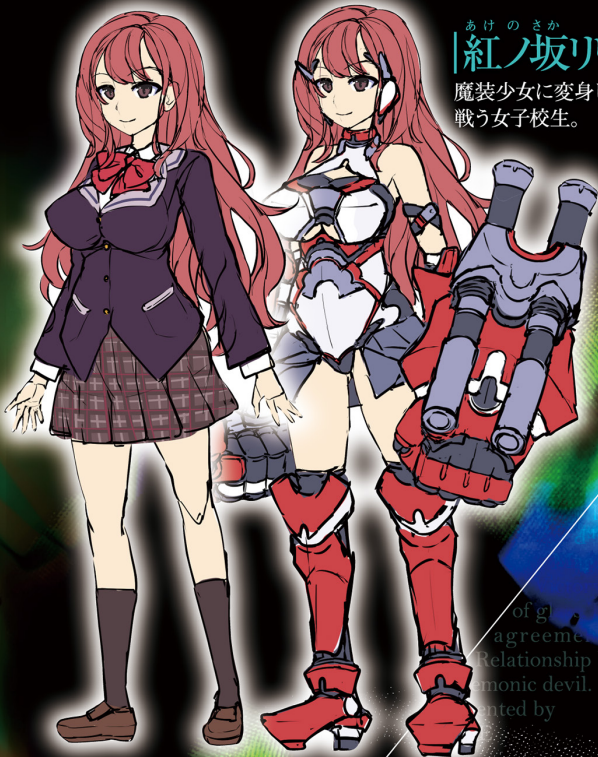
079 二話 ガラス一枚が隔てる幸福と恥辱

123 三話 初デートは初めての合意エッチの後で

163 四話 ファーストキスも見守ってやる

230 五話 魔装少女と魔装悪鬼の関係

259 おまけ



あけのさか

# 紅ノ坂リカ

魔装少女に変身して妖魔と戦う女子校生。

やぎら

## 柳楽ジン

親友のシュウジを救うため、魔装少女のサポートをする少年。

はせ

## 長谷シュウジ

リカとジンの親友。

# CHARACTER

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece of glass.The first date is after the first agreement etch.I will also watch the first kiss.Relationship between demonic girl and demonic devil.

Illustration by KatouRennyu

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece of glass.The first date is after the first agreement etch.I will also watch the first kiss.Relationship between demonic girl and demonic devil.

Illustration by KatouRennyu

## 一話 勝利と喪失

耳にしたこともないような鳥の鳴き声が聞こえると少年達は怯えた声を上げて身を竦めた。見上げようにも森の木々は空から隔絶するように頭上を覆っている。今が昼間なのか、陽が暮れ始めているのかすらわからない。

「……なあ、もういいだろ？ そろそろ帰ろうぜ」

小学校の教室では一、二を争う腕白な少年が身を縮こませて声を震わせる。

しかし先頭を歩く少年は意気揚々と獣道とも言えない山道を駆けあがって行った。

「ビビったんなら帰っていいぜ？」

教室内の格を決める威信を懸けた肝試し。大人達には絶対に足を踏み入れるなど口酸っぱく注意されている丘の中は、少年達が思うよりも空気が湿っぽく、そして薄暗かった。

進めば進むほどに寒気が覆い、獣の死骸と腐った果実が混ざったような匂いが濃くなっている。

それに加え数分歩く毎に目につく、「進入禁止」と書かれた立て札やテープで同級生は次々とリタイアしていった。

最深部に到着すると、残ったのは二人だけだった。目印の祠の前で少年が少女に振り返ると得意気に笑顔を浮かべた。

「どうよ？ オレ、一回もビビんなかったぜ？」

「はいはい。すごいすごい」

少女はぞんざいに褒めたたえようと、「それじゃさっさと証明のバッジ置いてきたら？」と肩を竦めた。

肝試しを完遂した者は証拠として名札を最深部の祠に置いてくるというルールだった。少女は興味がなかったので少年だけに促す。

「わかってるよ。つかこの祠、蔓だらけでどこがどうなってんのかわかんねーな」

祠は後から成長したであろう大木に呑み込まれるように存在しており、子供の体格では近づくことが困難だった。

「もういいや。えいっ！」

少年は面倒臭くなつたのか、手近にあった石を名札で包んで投げつけた。するとバキン、と碎けた音がした。おそらく腐りかけていた祠の木が破損したのだろう。

少女は少年の頭を拳骨で殴りつけた。

「なにやってんのあんたは！」

「いてえっ！」

「ほら、ちゃんと謝るときなさいよ。呪われても知らないよ？」

「へへーん。オレそんなの怖くないもんねー」

少年は少女に舌を出すと、その場を去ろうとした。少女はやれやれと頭を振ると、祠を振り返って「ごめんなさい」と謝り、少年の背中を追うのであった。

放課を知らずチャイムが鳴ると運動場は部活に勤しむ下級生でごった返した。その間を縫って俺達三人は帰路につく。

夏の大きな大会を前に、練習に励む下級生達の顔は険しい。そんな彼らを羨ましそうに眺める長谷<sup>はせ</sup>シユウジは、ただでさえ上背のある<sup>たく</sup>体躯を背伸びさせながら悔しそうに言う。

「くっそー。オレもこいつらに交じりてえぜえっ！」

一々無駄に声が大きいい。ガサツなのは初めて出会った頃から変わらない。当時は無神経な奴だと、どちらかといえば苦手な部類に入っていた。

「シユウジ。声デカイ」



「長谷君。声大きいから」

俺達二人から同様のツッコミを受けても、意に介した様子もなく両拳を握ってわなわなと震えている。

シュウジはバスケット部のエースでキャプテンだったが、我が校は一応進学校なので部活の引退は早く、夏前には大抵の部活はバトンタッチを済ませていた。

「オレの熱い血潮はまだコートに置いてきちまったままなんだよおっ！」

運動場の中央でそうわめく彼の後頭部を、我らが三人組の紅一点、紅ノ坂<sup>あけのさか</sup>りリカの手が勢い良く叩く。小気味の良い音が運動場に響き渡った。

そのまま彼女がシュウジの耳を引っ張って歩きだす。

「はいはい。長谷君？ 練習に集中してる後輩に迷惑掛けちゃダメでしょ？」  
澄ました顔のまま、手馴れた様子でシュウジを引っ張って行く。

「イデ、イデデデッ！ リリカ、わかった、わかったからっ！」

リリカはどちらかといえば背が高い方とはいえ、一見してすらりとしたスレンダーな体型をしている。到底ガタイが良いとは言えない。そんな彼女に大の男がいいように制御されている。

しかしそんな光景もこの学校では珍しくもなんともなく、周囲の人間は俺も含めて気に

留める様子もない。

「校内では随一の身体能力を有するシュウジでも、リリカの手には掛ければリードに繋がれた大型犬とさほど変わらないな」

そんな二人の背中を眺めながら俺が鼻で笑うと、シュウジは耳を引つ張られながら俺を振り向く。

「馬鹿野郎！ ジン！ オレはな！ いつだって鎖から解き放たれた狼……痛い痛い！」  
「長谷君。本当うるさいから。ジンの言う通りリード着けるよ」

リリカのその口振りは、手の焼ける弟を相手にする姉そのものである。

実際リリカとシュウジは幼少の頃からの付き合いで、同い年ではあるものの、リリカの方が姉貴分な子供時代を送っていたらしい。

いつかシュウジが言っていた。いつも通り屋上で三人で昼食を摂っていた時だろうか。

「子供の頃の記憶を紐解くと、大体オレが悪戯をしてリリカにど突かれてる思い出しかない」

リリカがうんざりするように俺に対して肩を竦めると、シュウジが言葉を続ける。

「でもそんなオレの尻拭いをいつもしていたのもリリカだからな。だから未だに頭が上がるらないんだ。あっはっは」



「何回あたしが長谷君の代わりに頭を下げたか」

恨みがましく、しかしどこか楽しそうにリリカは思い出に浸っていた。

凜々しさを伴った可憐な目鼻立ちのリリカは、その情深く世話焼きな性格に加えて、落ち着いた物腰で実際姉御肌として色んな人間から頼られる。

それでもやはりシウウジとの関係は幼馴染ということもあって特別だろう。

そんな二人に俺が割り込んだのは中一の時だった。とある事情も加味して俺達はあつという間に三人で居るのが当たり前の親友になっていた。

最初はその『とある事情』による上辺だけの付き合いだったかもしれない。

確かにシウウジはガサツで無神経だったが、誰よりも真つすぐで、裏表のない性格は沢山の人間に好かれ、俺もその例に漏れなかった。

どこか捻くれた日陰者の俺は、太陽のような彼を少し眩く思いながらも惹かれていった。そしてリリカについては言うまでもない。

一目惚れだった。

ぱつちりとした二重瞼の瞳はただ麗しいだけでなく、未来を真つすぐ見据える自信と力強さに溢れていた。

平均よりはやや高い身長に、すらりと伸びた四肢は、同性からも憧れの目で見られてい

る。

ただ均整が取れた体型というだけではない。その華奢きゃしゃにも見える体軀に、女性らしい起伏が隠されていることを俺は知っている。

少し赤みがかつた長い髪は、風に揺れる度に甘くも清涼な果実の芳香をまき散らす。

そんなリリカ本人は飾り気の薄い、常に自然体な振る舞いをするものだから、余計に男を引き寄せた。

しかし彼女は恋人を作ったことはない。そんな暇はないからだ。

「それじゃあたしとジンは受験勉強あるから。ちゃんと家で大人しくしてなよ？」

校門を出ると、リリカがシュウジに向かつてそう言う。シュウジは鬱陶しそうに手を振りながら応えた。

「へいへい。俺だけ仲間外れかよ。寂しいねえ」

「じゃあ長谷君も一緒に勉強する？」

「じゃあお前も一緒に勉強するか？」

シュウジは痛快そうに笑った。

「いつもハモリながらオレを窘たしなめるなよ。まったく、オレの方が付き合い長いのに、よっぽどりリカとジンのが息が合ってるな」

その言葉に俺は内心くすぐったい気持ちに捉われる。リリカとシュウジが姉弟同然のよ  
うな幼馴染だとはいえ、リリカに恋心を秘める俺としては、やはりその過ごした時間の長  
さに対しては嫉妬する部分もあった。

しかし俺とリリカの数年は密度が違う。絶対に失敗できない一つの目標について、手を  
取り合って邁進してきたのだ。

「大体シュウジはスポーツ推薦で受験する必要がないだろ」

俺の言葉にリリカが首を振る。

「いやいや。それでも長谷君には教養が必要だからね。やっぱり今から皆でお勉強会が必  
要かも」

お勉強会という名のリリカからの説諭が待っていると察したシュウジは、わざとらしく  
肩を震わせた。

「二人の健闘を祈る。それじゃまた明日っ！」

と全力疾走で帰って行った。

それを見届けると俺とリリカはくすぐすと笑いあいながら俺の家へと向かった。

「ああ見えて長谷君。あたしとジンの勉強を邪魔しないようにって配慮したんだよ」

「冗談だろ。逃げたようにしか見えないね」

などと訝<sup>いぶか</sup>しみながらも、俺もリリカの意見に同意していた。ガサツで無神経だが、それ以上に友達想いな奴なのだ。

だから俺のような卑屈で根暗な人間でも二人の間にすんなりと溶け込め、こうやって普通の友達を演じられている。いや、いつしかそれは演技ではなくなっている。

俺はシュウジを親友だと思っっているし、その気持ちは中一の時に二人に近づいた俺の『とある事情』の目標達成に対する想いをより強固にさせた。

今も走り去っていくシュウジの背中を見つめながら、握った拳に力が込められた。

リリカもそんな俺の決意を感じ取ったのか、いつも通り自信に満ちた微笑みを浮かべて言葉を掛けてきた。

「ジン。ありがとうね。あたしとシュウジの友達になってくれて」

「……最初はただの任務でしかなかった。今だから言うけど、二人とこんな仲良くなるつもりなんてなかったよ。データさえ取れば良いと思っただ。ただ……」

「ただ？」

隣を歩きながらリリカが顔を傾けて俺の顔を覗き込んでくる。その仕草と眼差しで、俺の心臓は熟した林檍のように甘酸っぱくなった。

「……シュウジが底抜けの馬鹿で、底抜けに良い奴だったから。だから今は本気でシュウ

ジを守りたいと思ってる」

その言葉にリリカは普段の大人びた雰囲気を崩して、満面の笑みで「うん！」と返事をした。

それに君が好きだから、などとは今はまだ言えない。まだそれどころではない。

俺達の歩調に緊張感が漂う。

ついに今夜なのだ。

「怖いかな？」

「全然。ジンと二人だから」

俺に全幅の信頼を寄せるその笑顔は、俺に優越感を与えると共に。再び深く深く恋に落ちとしてくれる。

その信頼のもと、長きに渡った実験は今日終わりを迎え、そして実践が始まる。

俺とリリカが放課後二人になることが多いのは受験勉強のためなどではない。どちらも学力は十分だし、なにより進路どころか生活を全面的に保障されている。

シユウジは何も知らない。知る必要はない。

俺とリリカが育んだパートナーシップで彼を救う。

俺と、リリカで。

三人が通う学校からは、雄大にそびえたつ山脈が否応なく視界に映る。その山脈から一部分、学校側に突き出るように丘が形成されていた。

山脈を城壁とするならば、まるで見張り塔か関所のように存在するその丘は、全く人の手が入っておらず、生い茂る森林は日中でも陽光を完全に遮る。

その奥深くに、小さな祠がみすぼらしく放置されていた。蔓が全体を覆うようにびつりと巻き付き、目を凝らさないと祠と認識することは困難極まった。

ただでさえ薄暗い森の中が、陽が暮れると完全な暗闇に覆われる。

月は満ちており爛々らんらんと輝いていたが、到底月光など届かない奈落のような場所に、その祠は朽ち果てていた。

それがドクンと、脈打つように鳴動した。途端に鳥は一斉に飛び立ち、獣はおろか虫まで丘から逃げ出すように必死に這いずり回った。

コールタールのような泥が祠から漏れる。闇より深い黒を有したそれは、やがてその場で人の背丈より大きい獣を象った。

産声を上げたそれは鴉に似ていた。目玉は一つで、クチバシの中からは蛇のような舌が伸びた。

そんなことでさえ些事に思えるほど、普通の鴉と決定的に違うのは、体長が人間と同じくらいか、少し大きいという点。

「グエツグエツ」

蛙のような鳴き声を上げると、ひよこひよここと数歩前に歩いた。

幹の太さが直径一メートルを超えようとする杉を目前に据えると、真つ黒なクチバシで袈裟斬りするように斜めに突いた。

大木は鉋で払われた竹のように切り払われて倒れる。

その鴉のようななにかは翼を広げる。一つ一つの羽が蛆虫のように蠢うごめいていた。

翼を広げたままその場で回転すると、周囲に生い茂っていた先程と同じくらいの本々が纏まとめて根本から刈り取られた。

「グエツグエツ」

己の力を確認して満足したのか、跳躍するように森林から夜空に一気に飛び出た。

まるで恐竜のような翼をバサバサと羽ばたきながら、その単眼が見つめるのは学校のその先、長谷シユウジの家だった。彼の家は丁度祠と学校の延長線上に在る。

上空でぐぐつと身を縮こまらせる。全身の筋力と魔力が凝縮するように丸まった彼は、まるで空中に浮かぶ砲弾だった。その状態から翼を激しく羽ばたかせると、爆ぜるような



音を鳴らした。弾丸めいた滑空で長谷シウジのもとへと飛び立つ。

それは鳥というにはあまりに速すぎた。時には新幹線をも凌駕する地球上で最速の鳥、ハヤブサの速度をその巨体で更に上回った。

なんの障害も無ければ、数分と経たずに長谷シウジ宅に到着しただろう。

祠と長谷シウジ宅の丁度中間地点である、学校の屋上に、両腕を組んで彼を睨み上げる少女の姿をした魔力の塊が無ければの話だが。

それは明らかに自分に敵意を抱いていると本能で察した。このまま素通りはさせてもらえないし、それに値する力は保有していると、生まれたての彼でも理解した。

翼を精一杯広げると、彼女の目の前で急停止した。

「魔装少女リリカ。祟りと接敵を確認。祠より受肉した最初の祟りを、これより『アルファ』と呼称する」

俺は自宅地下の研究室のパソコンの前に座り、ヘッドセットのマイクに淡々と言葉を投げかけた。やや前傾姿勢になり拳は強張っていたが、過剰な緊張や焦燥は無い。片手の指では数えきれなくなった数年間。やるべきことはやってきたという自負が俺にはあった。

「了解。これよりアルファの迎撃に移る」

校舎の屋上で仁王立ちしているリリカの声も同様に、微塵みじんの震えも感じられない。

「アルファの動向は？」

研究室にある無数のモニタは、リリカの周囲を全て映し出していたが、それでも通信のテストも兼ねて尋ねる。

「急停止して、あたしをじろじろ見てる」

「やれそうか？」

「余裕」

リリカは即答したが、パソコンが表示する彼女のバイタル数値は、明らかに不安と緊張を表していた。

当然だ。彼女はあくまで普通の女の子なのだ。いくらシミュレーションを繰り返してきたといっても、こんな化け物を目の前にして平常心を保てるわけがない。

安全な場所から指示を出すだけの俺とは違い、直接対峙している彼女の恐怖はまさに理外のものだろう。

それでもリリカは言った。

「この数年、あたしとジンが積み重ねてきた時間を信じる」

その言葉と共に、彼女の脈拍心拍が落ち着いた。彼女の信頼が心強く、なにより嬉しい。

俺は更に拳に力を込めると、力強く言った。

「リリカ！ そのクソ鳥ぶっ飛ばしちまえ！」

「はは。ジン。まるで長谷君みたいに暑苦しい声だよ」

同時に様子見をしていたアルファが、そのクチバシをリリカに突き付けた。

アルファはリリカを訝しむように観察していた。

胴体の胸当てだけは頑強そうだが、それ以外はキャミソールのワンピース。それも下着を隠すには殆ど意味を成さないようなミニスカートしか纏っていない。実際のところ、繁殖に適したしつかりした腰つきの真下に位置する、黒いレースの下着は半分以上が常時丸見えだ。

しかし露出は多いものの、その布地が確かに魔力を帯びた耐久性を伴っている装甲であることは一目瞭然だった。

とはいえずらりと伸びた太ももや肩回りは大胆に肌を晒している。

その代わりに膝と肘の先には、やけに堅牢で図太いフォームの甲冑を装着していた。赤を基調としたそれは機械で作られた巨人の手足のようで、リリカの胴体と同じくらいに太い。

少なくとも先程の木よりかは余程頑強に思えたアルファは、殆どない知能の中でも迂回しようという考えがよぎる。

しかしそれは一瞬で却下された。目の前で自分を睨む少女は、自分の獲物を守ろうとしていることを、言葉でなく殺気で伝えてきた。

ならばここで殺す。アルファは首を仰げ反らせ、そしてクチバシを突き出した。その速度は野生の肉食獣でなければ反応できるものではない。

しかしクチバシが砕いたのは屋上の床だけだった。コンクリートが砕けたクッキーのように飛び散る。

リリカは完全に見切りながら半歩だけ下がっていた。そして右腕をそつと前に差し出す。「充填。照準。完了」

リリカの右腕が古代文字のような幾何学模様を巻き付けながら発光する。

アルファは相手の力量を見誤ったかと、全力で追撃することを選択した。再び大きく首を仰げ反ると、瞬きする間もなくリリカを再びクチバシで貫こうとした。

魔力によって強化された動体視力は、目の前に迫りくるクチバシを捉えていた。それでもリリカは臆することなく、訓練通りにそれを放つ。宝石のような瞳の光彩は、未来を勝ち取る力強い意志で満たされていた。

「ドラグーン。発動」

リリカの手の甲の上にある発射口が開くと同時に閃光が走る。魔力を帯びた武骨極まる鋼の杭が超高速で射出された。

パイルバンカー式魔装兵器ドラグーン。

容易よういに大木をなぎ倒すクチバシを、真正面から衝突させると粉々に打ち砕いた。

右腕に巻き付くように光っていた幾何学模様が消える。それは魔力の再充填の要を意味した。

アルファは苦悶の鳴き声を上げながら背中を向けて羽ばたき逃走していく。ダメージは深刻で、本来の弾丸めいた飛行には程遠く、ふらふらと浮き上がるのが精一杯といった様子だった。

それでも空中に逃げ出せたのは大きなアドバンテージとアルファは少ない知能で考える。己のクチバシを砕いたあの個体は、翼を持っていないし、投擲武器も有していないように見えたからだ。

リリカはアルファの背中を追って疾走した。

「逃がすわけないでしょ！ あたしはっ！ あたしとジンはっ！ ずっとこの日のために歯を食いしばってきたんだからっ！」

そしてそのまま屋上から飛び降りた。

右腕には再び幾何学模様が浮かび、ドラグーンの再充填を知らせるが、アルファとの距離は五メートルは開いていた。ドラグーンの間合いは三メートル。

リリカの踵から脰脛ふくらはぎに掛けて無数の魔法陣が浮かび上がり、それらが炎のように光を放出すると、彼女は中空を蹴るように跳躍した。右足に続いて左足。

魔装少女が夜空を駆け抜ける。

アルファの背中にしがみつくと、右手をその首に押し当てる。同時にドラグーンの閃光が雷のように地面に向かって落ちた。

頭部を消失したアルファはそのまま墜落し、リリカは踵から光を放出しながら、ホバリングするようにゆっくりと着地した。

地面に足が着くと、丁度ガス欠のように踵から光を放出していた魔法陣が消えた。

「……長谷君は絶対に守ってみせる。あんた達なんかには負けないんだから」

彼女が睨む足元では、コールタールのような泥が地面に染みつき、そして蒸発するように霧散していった。

俺はヘッドセットマイクを投げ捨てると、息を切らしてリリカのもとへと向かった。俺

に用意された住処は学校とほぼ隣接している。ここが戦地という名の実験場になると想定されていたからだ。

リリカは魔装少女の出で立ちのまま、パイプ椅子に座り、毛布を肩に掛け、紙コップの飲み物を両手に包んでいた。『協力者達』が用意してくれたものだろう。

俺の到着を視認すると、満面の笑みを浮かべて手を振った。

立ち上がろうとするのを俺が制する。初めての实战だ。消耗は激しいだろう。

「そのまま座っていい」

「どう？ 中々上手くやれたでしょ？」

「百点満点だ」

「でもやっぱりドラゴンの射程や再充填までの時間は改善の余地有りだね。あとは跳躍もギリギリだったし。まだまだ課題は多いみたい」

リリカの口調は少し高揚で上擦っていた。それも当然だ。普通の人生を歩むはずだった女の子が、化け物と命を懸けた勝負を交わしたのだから。平然を装えるだけでも彼女の精神力の強度が窺える。

研究室に帰投させたりリリカの両手足の兵装を外すと、手術台のような大仰なベッドに横たわらせせる。



相変わらずその肌の露出の多さには目のやり場が困る。ただでさえモデルのような肢体なのに、生足は太ももの付け根から爪先まで全て曝けだしている。芸術性すら感じるほどの美脚。それでいて太ももは瑞々しい肉感に溢れ官能的だ。眩しいほどに白く輝くそれは、黒いレースのショーツとの対比があまりに蠱惑的で、俺は直視することができない。

その下着を隠しきれないミニスカートや、一見大人びた下着にしか見えないショーツも、全ては魔術兵装として意味のあるデザインで、決して俺の趣味というわけではない。空气中に漂う魔力の吸気なども考え、肌の露出バランスなども機能性のみを極めている。

しかもこのショーツ、正面から目にするだけでは気づけないが、実は本来クロツチがある部分に縦の切れ目が入っていて、少し左右に広げれば陰唇が丸見えになる。勿論もちろんそれも魔装少女の機能を高めるために不可欠なデザインだった。

リリカも当初は恥ずかしがっていたが、すぐに慣れたようだった。

「あの馬鹿を守るためだしね。それに基本的にはジンにしか見られないんだからいいか」  
 そうはにかんでくれた彼女の言葉は、俺への絶大な信頼の表れだ。

リリカの身体の節々に電極パッドを張りながら、改めて思う。それにしてもなんと均整の取れたプロポーション。そして美しい顔立ち。聡明であり、不屈の精神を胸に秘め、更には深い母性を有する。

若くして研究者としての才覚が頭一つ抜けているこの俺に、何一つ見劣りしない女性。祠の祟りは俺とリリカという優れた遺伝子を引き合わせるために発動したのかもしれない。電極パッドを張り終えたと、毛布をその上に掛ける。

「魔装少女。解除」

そう言ってからパソコンのボタンを押す。何千回と繰り返してきた儀式だ。リリカも完全にリラックスしている。

「んっ」

電気のように魔力が流れると、彼女は少しくすぐったそうに吐息を漏らし、背中を浮かした。同時にリリカの身体から魔装は光を帯びながら消失し、毛布を掛けたままとはいえ全裸となる。

リリカは毛布を纏いながら、脇に置いてあった制服に手を伸ばした。俺は着替えの間はずっと後ろを向いている。どちらから言い出したわけでもないが、最初の変身実験の時から不文律となっている。

親しき仲にも礼儀は必要だ。

しかしリリカからは信頼と共に、俺への好意をひしひしと感じる。幼馴染を守るために苦楽を共にした長くも濃密な年月は、お互いに特別な感情を芽生えさせるのが必然だろう。

互いに優れた能力を持つ同士ならば尚更惹かれ合う。

「もういいよ。ありがとね。ジン」

振り返ると制服姿のリリカが居た。凜々しくも愛らしい微笑み。俺の太陽。

「『企業』の試算によると、次の崇りの受肉化は早くも数日後らしい。今日のところはゆっくり休んでくれ」

「うん。ジンの方こそね。それと……」

リリカは気恥ずかしそうに視線を逸らし、そしてモジモジすると俺を見上げた。

「ありがとね。一緒に戦ってくれて。本当はアルファを前にした時すごく怖かった。でもジンの声で足の震えが止まった」

頭の中で羽毛が舞い散るような高揚感。心拍は心臓を破裂寸前まで追い込む。

「パートナーなんだから支え合うのは当然だろ」

リリカはくすぐったそうにはにかむ。

「長谷君は手の掛かる弟みたいだったけど、ジンは頼りになるお兄ちゃんって感じ」

「そんなことはないさ。リリカは俺の姉さん女房だよ」

うっかり俺のそう言って欲しいという本音が漏れ出てしまう。しかしそれは冗談だと伝わったらしい。リリカは愉快そうに笑うだけだった

「あはは。女房つて」

ともかく俺達は最後にハイタッチをして、幼馴染の守護という悲願の第一歩を祝い合うと解散した。

俺とは違い、ごくごく一般的な家庭で生まれ育った彼女が、何故こんな戦いに身を投じなくてはならなくなったのか。

それは十年近く前に話が遡る。

この街の外れの山脈から突き出た丘には、誰からも忘れ去られた祠があった。

そこへ肝試しに訪れたのが幼い頃のシュウジやその同級生達だった。当時ガキ大将だった彼は、己の勇気を証明するために祠に悪戯をってしまったらしい。

そして祟られた。

ここまではよくある話だ。

大抵は高熱を出すとか、財布を紛失する程度の不運に見舞われる程度で済む。

しかしその祠が保有していた祟りはあまりにも濃度が高かった。文献にはあの山では昔、大規模な落ち武者狩りが行われたと記されている。

祟りは数年から十年程度で、祠からこの世に受肉して、シュウジを呪い殺すと算出され、

とある組織の監視下に置かれた。

通称『企業』と呼ばれる、要は魔術師の組合である。

彼らは魔術を管理し、その発展を目的とする研究機関であり、裏社会から政治経済にも深く関わる大規模な秘密結社である。

そのトレードマークのような存在が『魔法少女』である。昔から日本を守り続けてきた守護者であり、本来であれば祠レベルの怪異は彼女達が対処する。

だが、『企業』がこの町へと派遣したのは魔法少女ではなく、俺だった。

俺の家系は代々魔術師で、当然『企業』にも加盟していたし、なにより俺は幼少の頃から、こと研究や開発に関して神童の名を馳せていた。魔術の実技はそれほどでもなかったが、まだ陰毛も生え揃っていない頃から一つの研究部門を任されていた。

それが量産型魔法少女。魔装少女の開発だ。

魔術師は慢性的に人材不足で多忙だ。今回の件でも十数人レベルで隠蔽工作に当たっている。

戦闘で破損した校舎を元通りに修復したり、一般人の目を誤魔化す結界を張ったりと、何かと便利な魔術を行使できる彼らだが一つだけ欠点がある。魔術師は基本的に激しい戦闘には向かない。精々低級霊を相手にできるくらいだ。今回のアルファのような一定レベ

ル以上の怪異を相手にするのは、魔法少女の役割だったのだ。

近年、その魔法少女の数は激減しており、最盛期には国内だけで一万人近く居た魔法少女が、今ではもう千人を割るといふ。

魔法少女はそもそも適合者が少なく、更に魔力の出力が個人差で大きすぎた。

その点魔法と科学を融合させた魔装少女は適合する者をそれほど選ばず、個人差に依らない安定した出力も上層部には魅力的に映った。

『企業』は世界の混沌や破滅を望む人間の集まりではないが、積極的に社会の秩序を守りたいなどという正義の集団でもない。常に優先されるのは知的好奇心。上層部はシュウジの命などなんとも思っていない。

定期的にアルファのような実験素材を生み出してくれる祠を、『企業』は体の良い魔装少女の試験装置として利用しようと考えたのだ。

正直に言えば、俺も最初はそんな風に思っていた。魔術という真理に縁の遠い一般人など、衆愚ですらないとすら考えていた。だから最初は魔装少女のデータを取る為だけにリカとシュウジに近づいたのだ。

でも今は違う。

純粹にシュウジを、友を守りたい。

真理を追究する同志でもない、ただ声のでかいデリカシーの無い男を俺は気に入ってしまっていたのだ。

人付き合いが苦手は俺は一人でゆつくり研究できる施設、つまり今の俺の住処である家屋の地下に研究所を要求し、『企業』はそれに応じた。

魔装少女の適合者は他にいくらでもいたが俺はリリカを勧誘した。

一目惚れした雑念が混じっていたことは否めないが、それ以上に弟同然の幼馴染を守るという彼女が持つ大きなモチベーションが重要なのは確かだった。

文字通り命懸けの戦いになる。生半可な動機では務まらない。

彼女の返事は聞くまでもなかった。勿論最初は彼女もそんなオカルト話は半信半疑だったろうが、一度魔装少女に変身させると、魔力に満ちた己の身体を以て、『企業』が暗躍する裏の世界を信じざるを得なかった。

『企業』としても魔装少女の試験はなるべく上手くいって欲しいらしく、木っ端の構成員ではあるが、こうして事後処理などに人手は割いてくれている。祠の観察も続け、崇りの受肉時期を常に計算し続けてくれた。その結果今晚も準備万端で迎撃できたというわけだ。

金銭面などで研究の後押しも惜しめない。それらの助力について感謝はしているが、や



はり俺としては、リリカと二人で一步を踏み出せたという気持ちが高い。

そう。まだ一步進んだに過ぎない。

祠にはまだまだ祟りが詰まっている。シウウジを殺そうとして、これからも受肉しては湧き出てくる。

しかし俺とリリカならきつと乗り越えられる。

暫く研究室で、手の平に残るリリカの温もりを感じていた。彼女の触れた場所からは、青々しい果実の甘い香りが漂っていた。

居ても立っても居られなくなって俺は深夜の街に繰り出した。なにとはなしに学校に足を向ける。『企業』の魔術師は撤退済みだった。仕事が早い。今晚この街で、化け物が暴れた痕跡は何一つ残らず消える。『企業』は政府とも強い繋がりを持っているので、警察や報道機関のコントロールも完璧だ。

現場の視察ついでに、その辺をウロウロと歩いていると、深夜の校舎裏にリリカの後ろ姿を見つけた。夜風で静まりつつあった俺の胸が途端にときめく。先程ハイタッチした手の平がじんわりと熱を帯びた。

これは運命だ。もうこの日、告白してしまおう。そしてより強固なパートナーシップを

築き、シュウジを守るのだ。

優れた雄には、優れた雌。当然の摂理だ。

しかし俺は、リリカに近づく前に気づく。彼女と対面するようにもう一人居る。俺は慌てて物陰に隠れた。月明かりが照らすのはシュウジの姿だった。

「どうしたの長谷君。こんな時間に」

リリカの声が弾んでいる。それもそうだ。目の前の幼馴染を、今まさに命に代えて守ったのだから。シュウジの元気な姿がより己の戦いの意味を実感させたのだろう。

「いや、なんか知らんけどついフラっとここに来たくなくなってな。リリカは勉強帰りか？」  
「まあそんなところ。すごい偶然だね。あたしもなんとなくここに来たくなくなったんだ」

リリカとシュウジはそう言葉を交わしたきり、見つめ合って静寂が二人を包む。しかしその無言の気まずさは、明らかに甘酸っぱさで満たされていた。

リリカとシュウジの鼓動の音が聞こえる。特にリリカのそれは、戦闘を終えた高揚だけじゃない。どちらでも聞き覚えのある心音。俺がリリカに向ける、恋の音色。

二人が無言のままくすぐったそうに笑った。胸がざわつく。そしてリリカが口を開いた。「……なんかこうやって長谷君とここでばったり会えたのって、すごく運命みたいな感じ。特に今晚っていうのが」

「そうなのか？」

「……うん。えへへ」

リリカは愛らしく笑うと、今まで長い年月を掛けて胸に秘めた想いが、零れだすように言った。

「……長谷君。ずっと好きだったよ」

俺が聞いたこともないじらしい口調でそう言うと、「……良かったら付き合ってください」と頭を下げた。

シュウジは慌てた素振りを見せながらも、覚悟を決めたように生唾を呑み込む。

「……オレも、リリカがずっと好きだった」

「……本当に？」

顔を上げたリリカは信じられないといった様子だった。そしてそのまま二人は恥ずかしくそうに笑い合った。

「正直絶対振られると思ってた」

両手を後ろで結び、顎を引いたリリカの真つ赤な照れ笑いは、月明かりしかない夜中でも、この世で最も可憐だと断言できた。

恋が成就した乙女の顔。なんと幸せそうに花開くのだろうか。

「こっちの台詞だつたの。リリカとは昔から距離感近すぎたからな。男として見られるのか不安だった」

「その言葉、そのままそっくり返すから」

二人がこの世の幸福全てを濃縮したような微笑みを浮かべ合う。

「ジンとも仲が良かったしさ」

そうだ。俺が居る。リリカと最も密度の濃い時間を過ごした俺が。

「ジン？ ジンはお兄ちゃんって感じ。誰かさんと違ってすつごく頼りになるんだから」  
リリカは俺を誇るように言った。その透き通るような笑顔は俺への好感度の高さを表していた。しかしその感情は俺とは交わらないことを確信する。

「もしかしてジンと二人で勉強してたのとか嫉妬してた？」

「……そりゃあちよつとはするだろ」

シウウジが気恥ずかしそうに顔を逸らす。リリカはそれが嬉しかったようで、くすくす笑いながら「馬鹿」と可愛く言った。その表情と声色を向けられたのが俺なら愛らしさで全身を溶かしただろう。

しかしそれらを独り占めできるのはシウウジだけだった。ただの部外者の俺にできるのは陰から盗み見ることだけ。

俺の胸に重苦しい闇が渦巻く。俺はゆっくり後ずさりながら、肩に押し掛かる絶望の重さに喉を詰まらせた。

「大体リリカってジンに対しては出会ってすぐ名前と呼んでたのに、俺のことはずっと苗字だしさ」

「だってジンってさっきも言った通りすぐお兄ちゃんって感じで親しみやすいんだもん。それに相棒だし」

「相棒？」

「ああ、えっと……受験勉強のね」

「じゃあ俺は？」

いつも颯爽とした印象のリリカが、やけにモジモジとしながら躊躇う。

「……好きな人の下の名前なんて、気安く呼べるわけないじゃん」

二人の周囲から、まるで搾りたて果汁を振りまいたかのような芳香が漂う。

「……じゃあこれからは呼んで欲しいんだけど」

リリカは「あはは」と照れ臭そうに笑うと、「暫くは恥ずかしくて無理かも」といじらしく答えた。

「そんな殊勝なタマかよ」

「ひどいなあ。あたしだって一応女の子なんですけど？」

地面や靴が濡れだした。俺の失恋を嘲笑うかのように雨でも降りだしたのかと思ったが、俺の落涙だった。夜空はリリカとシュウジを祝福するように満天の星空を輝かせていた。

二人はなにか話すでもなく、恥ずかしそうに頬を緩ませ、時折視線が交差すると、意味もなく頬を更に綻ばせていた。

「今だから言うけど、昔からリリカの気を引くことばかり考えてた」

シュウジの身も蓋もない言葉に、リリカは心底嬉しそうに顔を綻ばせた。

「なによ急に」

「小学校の時とかもさ、肝試しだって言っつて、祠に石投げちゃったりとかな。あれとか全部リリカに男らしいって思っつて欲しかったからなんだ。今思うと馬鹿みたいだけどさ」

その言葉にリリカは言葉を失う。その間にシュウジが懺悔するように続けた。

「あの祠にも悪いことしちゃったな。また今度謝りに行かないとな」

リリカは笑みを浮かべる。

「……そうだね。もう少し色々落ち着いたら、またあたしが一緒に行っつて、一緒に謝っつてあげる」

「色々っつてなんだよ」

「受験とか」

まさか今まさにその崇りと戦っているなどとは言えまい。

「そういえばあの肝試しも結局リリカと二人だけ残ったんだよな。流石<sup>さすが</sup>リリカ。俺の惚れた女」

茶化すようなシュウジの言葉にリリカが苦笑いを浮かべる。

「あの時本当はすごく怖かったよ。でも長谷君と一緒にだったから」

そして俺だけに聞こえるその台詞の続き。

『今も長谷君のためだから頑張れる』

二人の間に俺が男として割り込める隙などこれっぽっちも最初からなかったのだ。親友として、そして相棒としてしか俺は存在していなかったのだ。

「そういえばさ、付き合うのは暫く二人だけの内緒にしないか？ 特にジンには」

「え？ なんで？ むしろジンには真っ先に報告したいんだけど」  
リリカの口振りには、俺に対する強い友愛を感じた。

「あゝ……ほら。今まで仲良し三人組だったから、急に恋人でーすってなるの恥ずかしいじゃん？」

俺は確信した。シュウジは俺のリリカへの気持ちに気づいていたのだ。だから俺への配

慮として、そう提案したのだろう。

「ん〜……まあとりあえずは良いけど、でも頃合いが来たら絶対ジンには一番に報告しようね？ 今のあたしと長谷君があるのは、ジンのおかげなんだし」

「まあまあ。そこは男同士でタイミング計らせてくれよ」

二人の言葉には俺に対する純粋な友情と感謝しか感じない。

長い恋を結んだ二人が、友達を思う気持ちしか感じない。

気が付けば俺の足は勝手に研究室へと向かっていた。その足跡は涙で濡れていた。俺は嗚咽を漏らしながら二人から逃げるようにその場から去った。

ずっと俺の独り相撲だったのだ。

リリカがシュウジを長谷君と呼び、俺だけを名前呼び捨てにすることにずっと優越感を抱いていた。なんて馬鹿だったのだろうか。俺が好きだからではなく、シュウジの下の名前を呼べない乙女の恥じらいだったのだ。

魔装少女の変身時は毛布を羽織るとはいえ、全裸となる時後ろを振り向くだけで、退室をお願ひしてこなかったのも、俺のことを異性として意識していなかったから。

そんな俺が淡い想いを寄せているなどは、彼女は考えもしなかっただろう。

研究室に戻ると俺は鏡を覗き込む。如何にも自信過剰で、心が痩せた犬のような目つき



をした道化が居た。太陽のようなりリカの伴侶には到底相應しいとは思えない。

惨めだった。

もう消え去りたいと願った。

幼少の頃から神童と持て囃され、自分の願うものは全てが手に入ると勘違いしていた。

俺が愛した女は、きつと俺を愛してくれると疑うこともしなかった。

俺は全身に魔装少女変身用の電極パッドを張り付けていく。

適合資格があるのは女性だけで、非適合者には死が待っていることは動物実験で明白だった。

あまりに無責任な捨て鉢だったが、肥大していたプライドがぼつきりと折れた俺にはもう何も残っていなかった。

せめて自分が開発したこの装置で人生を締めたかった。俺が唯一残した成果。

もう俺が居なくてもりリカ一人でシュウジを守るだろう。

俺は顔をくしゃくしゃにしながへたり込み、「……りリカ。大好きだったよ」と泣きじゃくりながら、ボタンを押した。

夜遅くということもあつたので、蜜月の時間もそこそこにりリカはシュウジと別れて研

研究室に戻っていた。

それでも随分と話し込んだように思える。それもそのはず。長年互いに男女として意識していないのではないかという齟齬そごを乗り越えて想いを通じ合えたのだ。伝えたい気持ちは山ほどあった。

家まで送るといふシュウジの言葉をリリカは嬉しく思いながらも、「ジンの家に忘れ物してきちゃったから」と嘘をついて断る。

リリカはあくまで普通の人間で、魔術の行使も魔力の感知もできない。しかし魔装少女としての変身及び訓練を繰り返す内に、常人に毛が生えた程度だが、魔力の存在に対して鋭敏になっていた。

そんな彼女がシュウジとの幸せな談笑中に、激しい凶兆を感じた。しかし次の祟りの受肉化は早くて数日後だと聞いている。

とにかくリリカはジンと連絡を取ろうとしながらも、地下の研究室に戻った。しかしジンの姿は見当たらなかった。

なにか得体の知れない不安に襲われる。

それを振り払うとリリカは全裸になり一人で己に電極パッドを張り付け、魔装少女への変身を遂げると、『企業』への緊急コールだけを済ませて外に飛び出た。

（可愛い。可愛いよりリリカ。もつと蕩けさせてあげるからな）

そんな清廉な気持ちなど打ち砕くように、ジンはガツガツと腰を叩きつける。

リリカはその衝撃で、脳天まで男根に貫かれ犯されるような感覚に陥った。

その一瞬だけだが、彼女は完全なる敗北で頭を真つ白にさせた。自身を負かした雄に、力づくで屈服させられることを、心地良いとすら思ってしまった。

彼女の蜜壺にゆっくり浸透したジンの粘液の催淫効果は、彼女を淫らに昂たかぶらせる。

そんな自分を認めたくない一心で、リリカは必死に懇願した。意思の疎通が叶うかどうかすらわからない相手に、縋すがりつくように言葉を投げかけた。

「お願い、あたし、好きな人が居るのっ……その長谷君に赤ちゃん作ってもらうための場所なの……だから、だから……こんな強いおちんちんで、長谷君用のおまんこメチャクチャにしないでっ……こんな大きくて気持ち良いちんぼの形、長谷君と赤ちゃん作る前に覚えさせないでっ……」

（リリカ、大丈夫だ。この世でお前が一番幸せにできるのは俺なんだから。天才である俺の種子を受け取るに値する愛しいリリカ。もつともつと愛してやる）

ぐっ、と一際強く腰を押し込むと、亀頭をリリカの子宮口を押しつぶすように密着させ、一発目となんら遜色の無い射精を施す。

ドブドブとヨーグルトのような精液を直接子宮に流し込んでいく。その特濃の粘液による催淫効果は、リリカの口が忌憚の無い雌の意見を漏らすほどに、彼女の子宮を痺れさせた。

「あつ、ああ……♡ すっご♡ さつきより、びゅっびゅって射精てる♡ 硬くて熱いちんぽから、強いザーメンびゆるびゆる注がれてるっ♡」

自己の意識が溶けるような快楽の中、はしたない言葉を発する自分をリリカは恥じた。しかしそんな恥じらいは溶岩流めいた雌の悦びが燃やしつつ押し流していつてしまう。

「射精ちんぽっ、すごいっ♡」

そんな中でもリリカは踏ん張る。全ては支配されまいと、心の奥歯を噛みしめる。

リリカは紛う事なき処女だったが本能で理解する。男は連続で二度も射精をこなせば多少は満足するはずだと。トロトロに蕩けながらも、これ以上の快楽責めは無いと踏む。

(……うう……悔しいけど……気持ち良すぎる……全身が浮いてるんじゃないかってくらい心地良い……でも気を抜いちゃダメ……逃走のチャンスくらいはあるかもしれない)

強靱な精神力で僅かなチャンスを窺うリリカに、ジンは無常にもピストンを再開させる。

ジンはリリカの両足首を掴んで、彼女の腰が浮くくらいにぐっと前方に押し込んだ。リリカからも結合部が丸見えになると、その視線に驚愕きょうがくや焦燥が混じる。

「嘘っ、嘘っ……なんで、おちんちん、カチカチなの……もう精子でお腹いっぱいなのに、あつあつ♡ ガッチガチで、逞しいまま♡ こんなつ、こんなの……あつ、あつ、あつ♡ おつき♡ あつい、いいっ、いいっ♡ 勃起ちんぽ、硬くてきもちっ♡」

数年間二人で築き上げた、強く凛々しい魔装少女。

それを己の角で征服する。ジンの細胞全てが歓喜で満ち足りていく。

ドラグーンを破壊された両手を鬼の首に回して縋りつくようにぎゅつと握った。

「イクっ、イクっ♡ おまんこ来ちゃうっ♡ おちんぽズコズコされる度に、痺れるのが昇ってくるっ♡」

同時に彼の肉棒が、破裂しそうなほどに膨張する。

リリカはそれをドロドロに溶けた蜜壺でも感じ取ると、鬼を睨みつつも唇をきゅつと結った。

屈服させられている雌としての色香、そして魔装少女としての誇り、更には彼女本来の負けん気の強さが混じった表情をジンに向ける。

「もう無理だからねっ！ それ以上はもう精子入らないんだからっ！ 長谷君の赤ちゃん作る部屋、あんたの溶岩みたいな精液でもうタップアップなんだからっ！」

それでもジンが射精目前の激しいピストンを行うととろりと溶ける。



犯される喜びを知った女の身体は、もう彼女を快楽の濁流だぐりゅうで押し流していく。

「ああっ♡ あっあっあっ♡ いっあっ♡ イクっ、イクっ♡ イクイクイクっ♡ お腹っ、熱いっ♡ ちんぼとザーメンの熱さでイっちやうっ♡ イっちやうイっちやうっ♡ んんんっ…ああっ♡ イックウウウツツツ♡♡♡」

リリカが今夜一番甲高くも甘い鳴き声を上げると、ジンは素早く男根を引き抜いて射精した。それは気遣いなどではなく、胎内は確かに精液で満たせた感覚があったので、マーキングしたいという衝動からだった。

日本人には中々見られない大砲めいた逸物が、ビクンビクンと上下に暴れるように揺れながら、ビュルッ、ビュルッ、ビュルッ、と濃厚な白濁液の固まりを射出する。

リリカは背中だけでなく腰も浮かせて激しく絶頂の痙攣に身を任せていた。臉はぎゅつと閉じて、口は大きく開いていた。

「はあっ、はっ♡ はっ、ひい♡ あっ、ああ、はっ……んっ♡」

巨根から吐き出された濃密な精液は、リリカの額まで優に届き、彼女の顔を濡らしている。その際に、だらしなく開いた唇にも塊が飛散し、唇から口腔内こうくわうに垂れるそれをリリカは無意識に咀嚼そしゃくし嚥下えんげしていた。

当然その美巨乳や、腰のくびれも、精液でべとべとに濡れていく。

リリカはその最中、浮かした腰から、びゅっ、びゅっ、と潮を黒いショーツの切れ目から噴き続けていた。

ジンの腹部がそれを受けて濡れていく度に、お返しと言わんばかりに肉角をビクビクと上下に揺らし、ドピュドピュと彼女の白い肌を更に白く染め上げていった。

やがてリリカの背中と腰が地面に落ちると、彼女の瞳は虚空を見つめ、口元からは涎が垂れ続けた。

手足は弛緩しきったように大の字に広がる。

依然として続く絶頂で膣内が収縮と痙攣を続けているのである。ショーツの切れ目からは、潮の代わりに、精液が押し出されるように、びゅっ、びゅっ、と勢い良く漏れた。ジンの股間はまだ臨戦態勢を解いていなかった。

リリカの瞳がそれを捉えると、その眼光に己は魔装少女だという生気を取り戻す。

「……かかってきなさいよ……一晩中でも相手してあげるんだから」

もう指先一つ動かさない状態でも、リリカは挑発するように言った。

少なくとも性交中は殺されないだろうという打算や、少しでも時間を稼いで助けを待つという作戦もあったが、それ以上に、やられっぱなしでいてなるものかという気概を感じる。



その感情の由来は何も彼女の気質だけに依るものではない。

「……長谷君を守るために、ジンと二人で鍛え上げた魔装少女が、これくらいで音を上げるわけがないでしょ」

リリカは下唇をぎゅつと噛みしめると、自分に言い聞かせるようにそう言った。

その健気な気持ちが余計にジンを昂らせる。しかし彼の魔装が剥がれ落ちていきそうな予兆を感じた。

甲殻めいた魔装が消失していくと同時に、狂おしいほどに増幅されていた劣等感や劣情が理性を取り戻しつつあった。

文字通り魔を装い鬼となっていた間は、自分が自分じゃないかのように狂暴性の虜になっていた。それが醒めていく。

どちらにしてもこのままでは自分の正体がバレてしまうと、ジンは慌ててリリカの身体を転がしてうつ伏せにさせた。

その頃にはジンはリリカと同じように、手足だけが魔装を纏っている状態になっていた。厳密にはリリカはショーツも纏ってはいたが。

屹立した男根は、その質感や漆黒を失っただけで、強大な形状はそのままだった。ジンは元々暴力的なまでの巨根の持ち主だった。

半裸でうつ伏せになっているリリカの後ろ姿は、理性を取り戻したはずのジンに生唾を呑み込ませた。

なんて細く綺麗な背中。

豊かな乳房が地面で潰れて乳肉が脇腹からはみ出て覗き見える。

スレンダーな腰回りから、女性らしい開いた骨盤への曲線に思わず鼻息を荒くさせる。

「もう大丈夫だよ。ほらリリカ。俺だよ。正気を失っていたんだ」

そんな台詞が脳裏をよぎるが、ジンは無言のまま黒いシヨーツを引き千切った。

ぷりんとした臀部でんぶが露わになると、先程まで味わっていたリリカの柔肉を渴望するように鼓動を速めた。

もう鬼から人へと戻ったジンは、ひどく罪の意識を覚えながらも、まだ魔装を纏ったままの手でリリカの腰を掴んで浮かばせた。

膝をつかせて、土下座の体勢にさせる。

リリカには抵抗の気力と体力は残っていない。ただこのまま矜持を胸に秘めつつ、耐え忍ぶという覚悟だけを感じる。

突き上げさせたりリリカの腰は、白桃のような丸みを帯びていた。その肉感はどうしようもなく男を雄にし、人を鬼にさせた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

健 昂 良  
優 良

# ビビッド★ガール

VIVID GIRL

木森山水道 挿絵:SUE

淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン

スポーツ大好き女子校生の輝木ミコは、友達以上恋人未満な関係の幼なじみ元喜一郎たちと毎日運動をしながら楽しく過ごしていた。そんなある日、スポーツを地球から奪うために現れた宇宙人、プリンス・アウターの精神支配によって、人類が無気力なスポーツ嫌いの状態に陥ってしまう。唯一その支配におかれなかったミコは変身ヒロイン、ビビッド・ガールに変身するが……。敗北したミコを待っていたのは常識改変された淫らな体育祭! パイズリ玉入れ、挿入ムカデ競走、セックス全員リレー。身体に刻まれた淫紋の力はミコの正義と淡い恋心を砕いてゆく……。



淫紋つきで排む淫らな体育祭で勝利を掴むことはできるのか!?

各電子書籍サイトで今春配信予定!

## 電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場!

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録! ポリュームたっぷりでお送りします。

木森山水道  
挿絵:風丘



性豪オタクの  
奪取性具を  
極悪に  
取れ!!

元女騎士は  
新人スパイ

全校生徒の希望だった変身ヒロインが  
ラブラブ悪堕ちエッチを見せてく  
るなんて…



学園天使  
ツインセーフティ  
School Angels Twin Safety  
~PUBERTY新人専科おねだり異教件帳~

木森山水道 挿絵:洗面きぬ子

正義のスーパーヒーローチームが帰ってきた!

二次元ドリームノベルズ

# サンダークラップス!

リボーン シリーズ

THUNDER CLAPSI REBORN

羽沢向一 挿絵：緑木邑



各電子書籍サイトにて  
各巻好評発売中!



本誌にて好評連載中！  
大人気同人ゲームの  
単行本小説が  
電子限定で登場！！

# 魔剣士 ジネ2

乙女穢されし戦場

原作：まくらからソフト

小説：酒井仁 挿絵：桐島サトシ



全3巻各電子書籍サイトにて好評発売中!